

第1章 今年度のプロジェクト学習の概要

本プロジェクトは独立開校の理念である「社会参画型学力」の育成を図るために行っている。そのため、生徒自身が、協働して、考え、実行して振り返り、社会参画への手応えをつかめるよう、生徒たちの手で組織する事を念頭に置いている。

本校では、1年間を大きく3つのプロジェクトに分けて組織してきた。1つ目が5月～9月までを1つのスパンとした「Summer Project」。そして2つ目が9月～12月をスパンとした「Autumn Project」。3つ目が12月～3月をスパンとした「Winter Project」である。時期に応じて、総合的な学習の時間、特別活動、道徳を関連させ、生徒主体で探究的なロングスパンのプロジェクト学習を行っている（図1）。

「Summer Project」は、上級生のリーダーシップのもと、安居中学校生としての学習や生活のルールを学び、自己肯定感、連帯感を醸成していく。学校祭等がその活動にあたる。



【1、2年合同校外学習の準備の様子】



【学校祭のエンディングの様子】

「Autumn Project」は、学年の中でのプロジェクト学習がメインになる。地域とつながり、地域に還元する体験型の学習を学年で組織していく。



【生徒主催の「ホタル観察会」の様子】



【地域の方と稲刈りをしている様子】

「Winter Project」は、「Summer Project」、「Autumn Project」での学びをまとめる活動になる。1年間の学びを次年度のプロジェクト学習の構想につなげている。



【卒論を執筆している様子】



【「団結の会（立志式）」の様子】

そして、それらのプロジェクトの学びをつなげる役割を果たすのが、年に3回行う「My Learning」である。令和元年度、これまで本校で行ってきた「思い出語ろう会」を「My Learning」として生徒会と共に生まれ変わらせた。「My Learning」は、生徒全員が自分の「学び」に焦点を当て、主に A0 のポスター用紙に自分の言葉でまとめ、他者に語るというものである。回数は年間3回。「Summer Project」、「Autumn Project」、「Winter Project」が終わる節目として行う。研究主題にある「共に創る」という視点から教員が My Learning を行う場合もある。（保護者や地域の方、教職大学院の先生方も参加する）



【My Learning の様子】



【教師の My Learning の様子】

また、見通しをもって活動に取り組むことができるよう、特別活動、総合、道徳の包括的な年間計画の作成を行っている（図2）。生徒が自分たちのプロジェクト学習を実践していくプロセスにおいて、教師が生徒に獲得させたい価値項目を明確にし、プロジェクト学習と関連付けながら道徳等の授業を行うようにしている。その結果、1つの内容について深く、長期的に学習することができ、教科領域問わず深い学びの形成が可能になる。

さらに、図2の年間計画をもとに、各学年のプロジェクト学習を1つにまとめた一覧表を作成している（図3）。図3のように年間計画に写真と生徒が学んだ内容を記して作成する。そうすることで、生徒も教師も地域の人安居中学校の1年間の流れを理解しやすい。さらに1年間の過程を振り返ることで、生徒や教員は次の年度への目標を立てやすくなる。地域の方々に配ることで、より安居中学校について知ってもらい、学校の活動にも参加していただけるようになるとうれしい。

文責 川 端 康 誉

令和4年度

安居中学校プロジェクト学習の概要

つながりあって育つ学校

「社会参画型学力」

主役である生徒たちが、協働して、考え、実行して振り返り、
社会参画への手応えをつかむ

Summer Project(5月～9月)

Autumn Project(9月～12月)

■時期に応じて、総合的な学習の時間、特別活動、道徳を関連させ、生徒主体で探究的な、ロングスパンのプロジェクト学習を組織

- 特別活動・道徳を中心として、
上級生のリーダーシップのもと、
安居中学校生としての学習や生
活のルールを学び、自己肯定感、
連帯感等を醸成
・学校祭 等

- 道徳で「集団生活の充実」「向
上心」等を扱う

Cooperation

協力してカー杯やり抜く



- 総合的な学習の時間・道徳を中心として、
地域と繋がり、地域に還元する体験型学習
により、地域に生きる人材を育成
・学年プロジェクト(1～3年)

- 道徳で「勤労」「郷土を愛する態度」「社
会参画」等を扱う

Collaboration

企画段階から参画して案を練り、試行錯誤、
修正を繰り返しながら実行する



Winter Project(12月～3月)

- 総合的な学習の時間・道徳を中心として、自分たちの成長の集大成と次年度の目標
を立てる。

- ・小6インターンシップ(1年)
- ・立志式(2年)
- ・卒業レポート(3年)

- 道徳で「感謝」「他者とのつながり」等を扱う

Reflection

活動と学びの省察を行う



My Learning(年3回)

異学年での学びの交流・リフレクション
学びの発信(生徒も教師も)

- 公開研究会(11月)

- 福井大学教職大学院ラウンドテーブル(2月)

第2章 Summer Project

Summer Project は、「3年生のリーダーシップのもと、異学年協働による、学校祭成功に向けたプロジェクト」として特別活動に力点を置き活動を行った。学年プロジェクトは、通年での実施となっているが、学校祭期間は、Summer Project と題して、学校祭に注力して行っている。

今年度、生徒会と各委員長、級長を集めて、今年の学校祭はどのような形で行いたいのかヒアリングの場を設けたところ、昨年度の学校祭は、3年生だけで話が進んでおり、それを下ろす形ですべてが進み置いてきぼりになったという意見が多数出た。

そこで今年度は、実行委員会からでてきた要望と昨年度の反省を元に生徒会内部で活動の大きな軸だけ決めた。あとは、部門ごとに自由に決め、活動の責任も分散させることにした。生徒会担当としても一極集中で権力が集中すると、仕事全体の不利益もでかねない。そこも考慮し、生徒の意見がうまく我々教員の状況改善にも役だった。

本論では、生徒会長のT君について書いてくこととする。T君は心優しく発想力も豊かだが、大勢の前でしゃべることや意見を言うときに躊躇してしまい、うまく話せないことにコンプレックスを持っていた。彼が書いた卒論の一部を元に彼がどのように変わっていったのかここに簡単に記すこととする。

T君の卒論の抜粋

生徒会長として学んだこと、成長したことは、人前で話すことと、自分の思いを伝える大切さだ。1つ目に人前で話すことが成長した。まず僕は人前で話せなかった。生徒会長なのに話せなかった。最初の顔合わせでもうまく話せない、原稿を読んでも話せない。こんな状態ではもちろん人が大勢いる生徒総会などでもうまく話せるはずがなかった。その原因として自信がなかった。まず生徒会長に決まったとき既に自信がなかった。全員をまとめ上げる能力が自分にはなかったからだ。そして生徒会メンバーが決まった時も、自分を除く全員が生徒会長になっても遜色ないほど優秀なメンバーであったため自信がなかった。人前でなにかの発表をしているとき、失敗したら、「ほかの人のほうが会長になったほうがいい」などと思われたらどうしようとプレッシャーになり、眠れない夜もあった。

この状況が続いたまま、学校祭1週間前になった。川端先生の提案で全員の士気を上げるためスピーチをすることになった。この時の「面白いことをしろ。」と言われた時の衝撃は今でも忘れない。人前でまだ上手く話せない自分に「面白さ」を求められ、上手くできる自信なんてなかった。このスピーチのため川端先生に他校の生徒の前でスピーチを練習させてもらえる機会を頂いた。他校の生徒の前だと「喋れなかったら変な人と思われる。」などいろんなことを考えてしまい口から言葉も出なかった。回数を重ねるとちょっとずつ話せるようになったが、それでも話せないで森下さんに手伝ってもら

ことにした。そこで彼に言ってもらった言葉で自分が変わることができた。それは、「その場で伝えたいことを全力で伝える」だ。この言葉を聞き、いままでは生徒会長らしいことを求め、内容じゃなく、話し方や立ち振る舞いがしっかりできる見かけだけの生徒会長を求めている、それを意識しすぎて伝えたい内容がまとまらず結局うまく話せないということがずっと続いたが、こう言ってもらえたおかげで、自分の間違っただけを直すことができた。このおかげで、スピーチでは全員を盛り上げることができた。

この成功が自分に自信を持つきっかけになり、学校祭のオープニング、エンディングでも自信をもってやることができた。特にエンディングの最後の感想では、その場で自分が話したいことを話すことができた。「その場で伝えたいことを全力で伝える」と言ってもらえ人前でろくに話せなかったのが、人前でその場で伝えたいことを話せるまで成長できた。

しかし、まだまだ伸ばすことができると思う。僕は人前に立つと話し出すのにすごい時間がかかる。理由はその場で冷静になれず、頭で話したいことがまとまらないからだ。よくことが終わったあと冷静になるとその時言いたかったことが山ほどでてくる。人前に立ったとき冷静になれるよう意識していきたい。

2つ目に生徒会活動を経て自分の思いを伝える大切さを学んだ。今までは話し合いなどでもずっと受け身だった。委員会活動でもずっと誰かに意見はあるかと聞き続けたり話し合いには参加しているが自分から意見を出すことはあまりなかった。これは生徒会活動でも同じで、誰かに意見を聞き続けることが続いた。意見を自分から出せなかった理由は、意見をだすのが怖かったからだ。意見は持っていたがほかの生徒会メンバーの意見を聞くと自分の意見が他の意見に比べ弱く思えてしまい、発言することがなかなかできなかった。

この精神を変えるきっかけになったのは夏休み中に生徒会メンバーが集まって学校祭の話し合いをしている時、その時も話をまとめることに徹底していたが、その日はあまり意見が出なかった。ここで何かのきっかけを作るのがリーダーの役目だが当時の僕は「さらに空気が悪くなったらどうしよう」と逃げ腰の姿勢をとっていた。しかし今までのヘタレ精神を変える1歩目にしようと勇気を持ちその日は積極的に発言した。結果その日の話し合いは少し円滑に進んだ。ここで僕は自分の中で抱え込んでいても意味がないことを知り自分の思いを伝える大切さを学んだ。この学びがあったことで今までより積極的に意見を出せるようになり、今までの怖がっていたヘタレな自分から変わることができた。

今回彼は、自分の活動に常に責任を感じながら行っている。その誰のせいにもできない自分だけの責任が友達へアドバイスをもらいに行くきっかけになり、自分の駄目な部分と向き合う勇気をくれたのだと考えていえる。彼の成長の為に少しずつ試練を与えたが、私の中で『共に創る』とは、生徒が責任を持って活動できる環境をつくり、生徒一人一人の心理状

況や今置かれている環境をできるだけ踏まえ、状況にあった言葉かけや状況を創っていくことだと考えている。この学校祭を通して、T君は大きな成長を遂げることができた。立場は違えど他の生徒も同様に、成長について卒論やMy Learningで語っている。

文責 川 端 康 誉

第3章 プロジェクト学習における学年掲示版とMy Learning

Autumn Projectは、各学年で総合的な学習の時間、学活と道徳を中心として、地域とつながり、地域に還元できる活動を念頭に置きながら実践した。Winter Projectでは、これまでの取り組みを省察していくことを中心に、各学年が取り組んでいった。各学年の取り組みについては、この後第4章で掲載している。取り組みは各学年が中心となっているが、全校で共通して取り組んだ実践が「学年掲示版」と「My Learning」である。



【図1 学年掲示版】

1 プロジェクトの核

プロジェクトの核は「①生徒が主役」と「②地域に根ざした活動」の2つで活動を生徒とともに創っていった。

2 学年掲示版

学年掲示版には、3年間を貫くテーマ、今年一年の目標、そして活動を通しての学びを掲示した。(図1)

3年間を貫くテーマは、突き詰めていくことで、プロジェクト型学習になるのではないかと考えている。各学年のテーマは以下の通りである。

1年生…AGONGERS
2年生…AGO NAVI
3年生…AGO プライド



【図2 My Learningの様子】

それぞれの学年が、活動を通して得た学びをクラスで共有し、個人の学びで終わらせるのではなく、クラスとしての学びにすることができたと考える。また他の学年の生徒も見ることができ、安居中学校全体の学びとして共有できたのでは



【図3 公開研究会の様子】

ないかと思う。このように学びを可視化することは、とても重要であると考え。さらに、生徒にどのような学びがあったかを気づかせることは、教師の力量が問われることになる。教師が、どの生徒に、どのような学びが合ったのかを見取り、生徒にどのように返していくかもとても大切である。

3 年3回の My Learning

令和元年度、これまで本校で行ってきた「思い出語ろう会」を「My Learning」として生まれ変わらせた。活動の意味と内容を生徒会と当時生徒会担当の私と竹内教諭で再構築した。これまでは、活動が終わるたびに、原稿用紙を使ってまとめた新聞を持ち寄り、その活動を他学年と共に振り返るというのが「思い出語ろう会」であった。

「My Learning」は、生徒全員が自分の「学び」に焦点を当て、A0のポスター用紙に自分の言葉でまとめ、自分の言葉で話すというものである。回数は年間3回で「Summer Project」、「Autumn Project」、「Winter Project」が終わる節目として行った。1回目は、Summer Projectのまとめとして、A3のコピー用紙に自分の学びをまとめた(図2)。2回目は、Autumn Projectのまとめとして11月の公開研究会の時にいき、全員がA0の大きさのポスターにまとめ発表した(図3)。また、昨年度は教員も全員 My Learning を行ったが本年度は、多忙の中作成するのは難しいという声も多く聞かれ、生徒のみの My Learning となった。3回目はすべてのまとめとして3月に行った。3回目の My Learning は、生徒会中心に語るだけではなくて「学びを次につなげること」にも注力した。

今年は、すべての My Learning を生徒会が主催で行った。核となる教員が学校を異動しても理念が生徒の中に残り、生徒から生徒へ受け継がれ、深化していくと考えたからだ。以下、各 My Learning について書いていく。

1回目の My Learning は、それぞれの学びの内容が近いメンバーでグループを作り、学びを共有しやすくした。発表時間は質疑応答を含めて1人15分。ファシリテーターは3年生が行った。グループは事前に連絡して、グループのメンバーの発表内容を見て、質問内容を考える時間を設けた。3年生はファシリテーターとしての責任を考えさせた。1年生にとっては初めての「My Learning」となった。3年生はしっかりリードし、1、2年生の学びがどのようなものだったか、思考と行動を上手に結び付けていた。

2回目の「My Learning」は、公開研究会の日に行った。公開研究会と同日開催のため、外部から参加した教育関係者にも見ていただき、生徒に質問して下さった方もいた。褒められたり、承認されたりすることで、生徒は大きく達成感を得ることができた。

3回目の「My Learning」は、「学びを次につなげること」を意識して活動を行った。ワークシートも生徒会が考えた、筋に沿ったものを自分たちで作し、色々な先生からアドバイスをもらって改良した。その成果もあり、当日は生徒会が決めた「学びが次につながる」会になったように感じる。

文責 川 端 康 誉

第4章 学年プロジェクト (Autumn Project と Winter Project)

第1学年

I 学習のテーマと理由

3年間のテーマ

『AGONGERS～安居を元気にするヒーローたち～』

テーマ設定の理由

一人一人が特徴を持ったヒーロー集団の AVENGERS のように、「一人一人の個性とアイデアが詰まった集団になる」という思いを込め、安居 (AGO) にちなんで「AGONGERS」という目標を設定した。

II 1年間の取組の概要

1 1年間の流れ (別紙プロジェクト学習の概要参照)

2 共に創るプロジェクトにするために

10月、Autumn Project のスタート時に、3年間のテーマの副題にある「安居を元気にする」とはどういうことなのかについて生徒と教員で話し合った。話し合いの結果、子どもたちは「安居を元気にする」には「安居地区の魅力を生かすこと」「地域の人と関わること」が重要だと考えた。そして、ACS での異学年からのアドバイスを受け、目的をより明確にすることにした。「安居を元気にする」ために、自分たちから元気が伝わる『あいさつ』をしよう、地域の人と企画を共に創り上げていく過程を通して地域の人を元気にしていこう、地域の全世代の思いを聞いていこう、自分たちの活動を「見える化」して元気が伝わるようにしよう、地域を元気にする「環境」をつくっていこう、地域外の人とも交流しようといった案が出てきた。

次のステップとして、目的達成に向けての企画を考えた。安居地区は蛸で有名だが、生徒たちは蛸以外のものに着目した。安居地区に自生している桜や竹なども活用したいと考えたのだ。桜のライトアップをしたり手作りの竹のライトを作ったりしてはどうか、安居地区の自然を生かした幼児・小学生向け遊び体験を実施しよう、これらを単独で行うのではなく全てを取り込んだ祭をしよう、祭の屋台で安居の伝統料理を振る舞ってはどうか、実際に店を出している人とコラボしたら多くの人が来るのではないかと、といったように子どもたちの発想はぐんぐん広がっていった。祭以外にも、安居を象徴する大型オブジェを製作し、人目につく場所に設置したいと考えた。この案を出したTくんは、「地域外の人にも安居地区の魅力を知ってもらうために、地域外の交通量の多い道路沿いに設置したい」とつぶやいていた。

2月21日、本校で行われる家庭・地域・学校協議会の場で、これらの案をまとめたも

のを代表生徒数名が伝えた。地域の方は「桜のライトアップ」に興味をもってくださった。提灯や竹のライトづくりの段階で、地域のいろいろな世代の人を巻き込むことができる企画だと認めてくださった。しかし、地域外の人へのPRについては、目的をさらに明確にする必要がある、そうでないと地域の人たちの協力を得るのは難しいのではないかと言われた。生徒たちは、プロジェクト初期の段階で地域の方の思いを知り、地域の方の目線で企画を考えていくことの大切さに気づくことができた。共に創ることの意味を再考する貴重な時間になった。

11月、2月1日に行われる「小6インターンシップ」に向けて活動を始めた。担任が実行委員を募り、実行委員を中心に活動を進めさせた。その際、1学年担当教員全員で共通理解を図り子どもへの関わり方に気をつけた。最初は子どもたちだけで活動を考えさせ、教員は見守るだけにし、自分たちで考えた活動を他の生徒に見てもらい、活動を見せて自分自身で気づいたことや仲間との対話やアドバイスをもとに活動を練り直す、といった過程を通し、共に創り上げていく力を育てたいと考えた。

まず、実行委員を中心に、生徒全員が「地域の小学校6年生を元気にする」という目的で活動を行うことを確認した。次に、安居中の活動・生徒の魅力を知ってもらうために必要な事柄を考え、それらを4つのまとまりに分けた。その後、行事班・建物の構造班・学習班・部活動班に分かれ、説明内容と方法を考えた。アイスブレイクや校内の案内方法、スライド資料、小学生のグループ分け等、詳細について考え、実際に自分たちで動いて確かめた。



【班で説明内容とスライドを考える生徒】

所要時間については、最初に各班が自分たちが考える活動に必要な時間を全体に伝え、班で時間内に収まるよう具体的に活動を考えた。しかし、活動内容を詳しく考えていくうち、さらに時間が必要な班も出てきた。実行委員を中心に再度みんなで話し合って各班の持ち時間を最終決定した。

途中、担任は子どもたちの活動の様子を見て、「わかりやすく伝える必要性に気づいてほしい」と考えた。そこで、『伝えること』は難しい」という題材で道徳を行った。まず、グループの一人が、紙に描かれた図を他のメンバーに見せず口頭で説明し、他のメンバーは説明を聞いてその図を他の紙に再現した。その後、もとの図と説明を聞いて描いた図の双方を見比べ、互いに感じたことを言い合った。「自分が理解していることでも、相手にとってはわからないから、ちゃんと相手に合わせて話すことが大切だと思った。小6インターンシップでも、6年生の目線に立ってうまく伝えてあげたい。」「小6と中1で知っている言葉が大きく異なるから、小6にわかるように説明していきたい。」等の感想があった。

リハーサルは時間を計りながら本番の場所で行った。互いの班に向けて良かった点とアドバイスを伝えた。「朝学って小学生にわかるか？小学校になかったで。朝学習って言った方がいいんじゃない。」子どもたちのアドバイスには、道徳での「わかりやすく伝えたい」との思いが生かされていた。その後各班で本番に向けて活動の手直しを行った。

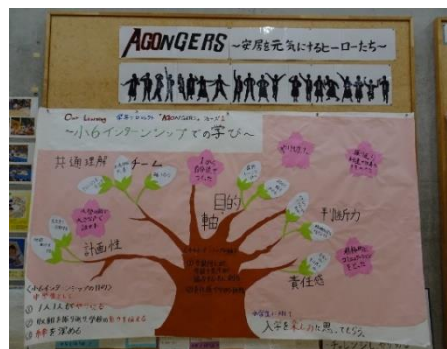
小6インターンシップ当日、笑顔で小学生を迎え入れた。リハーサルでのアドバイスを生かしながら、精一杯大きな声で小学生の方を見ながら話そうとしていた。中には、緊張で言葉につまる生徒もいたが、隣にいる生徒が次に続く言葉をそっと教えた。案内時のグループをつくる時、どこに集まるのかわかるよう手を大きく振って小学生の名前を呼んだ。授業体験で計算がうまく合わない時、隣のグループにいた仲間がやってきて助けていた。その場で考えなくてはならないことが起きた時も、互いに声を掛け合い、最後までやり遂げることができた。

後日、活動班ごとにホワイトボードを用いて小6インターンシップでの学びを振り返った。そして、生徒一人一人が気づいた成長や今後に向けての思いを紙面いっぱいに描かれた桜の木を用いて表した。土壌には小6インターンシップの目的が書かれ、幹には軸となった考えが書かれた。幹は目的・軸の枝、計画性、共通理解、チーム、判断力、責任感の枝に分かれて伸び、それぞれの先に花とつぼみがつけられた。花には達成できたことを、つぼみには今後に向けての改善点を書いた。3ヶ月にわたって取り組んできた自分たちの成果と課題をまとめ終え、子どもたちの表情には充実感と次への意欲があふれていた。

文責 森 阪 美 文



【活動班ごとの振り返りの様子】



【全体での振り返りをまとめた紙】

Ⅲ 成果と課題

私は年度当初、「石の上にも三年という。しかし、三年を一年で修得する努力を怠ってはいらない。」という、松下幸之助の名言をクラスに紹介し、「1年生だからこれくらいで十分」という考えを必要以上に持たないことを意識して様々な場面で生徒を支えたり、引っ張ったりするバランスを取ることを意識して活動に取り組んできた。特に、小6インターンシップにおいては、初めから教員で枠を作りすぎることなく、生徒の様子を見取りながら適切な支援を教員間で共通理解して進めることを意識した。何をどういった順番で

考えるのかも生徒に示さなかったもので、先が見えていなくて準備がなかなか進まない班があるのはもちろん、各班の状況を実行委員が把握できていない・共通理解が図られていない、発表の軸が定まっていなかったといった状況が生まれた。教員からの指導を「目的の整理と軸をはっきりさせること」のみにし、リハーサルを迎えると、こちらの想定以上に改善のための意見を積極的に言い合っていた。こういった流れもあり、「目的や軸をはっきりさせること」や「全員で共通理解を図る必要性」について多くの個人・班が振り返っており、大きな成果と考える。これは、『自分たち中心に本気で取り組んだというベース』があったからだろう。一方で、『適度な高さのハードル』だったかどうかについては反省の余地がある。TAさんのMy Learningには、「途中から進め方が分からなくなり、先生の動きを観察していた」とあり、今後の活動の参考にはなるだろうが、ハードルが少し高かったということだろう。まずは教師が、「生徒に付けさせたい力」を明確にし、どのような関わりがベストなのかを共通理解することが大切だと感じた。

次に、3人のMy Learningについて触れ、1年間の取組の成果をまとめるとともに、次への課題についても述べたい。まずはTTくんのMy Learningである。彼は、学級長・ダンスの実行委員・小6インターンシップの一部門のリーダーの3つを経験し、「リーダーについて軽く考えていた→それが苦しいから周りに任せた→何とかしないといけないと思ったが自分だけでやってしまった」と振り返り、「軸を早めに決めて協力して取り組んでいきたい」とまとめていた。次にOHさんのMy Learningである。彼女は、年度当初に定めた個人目標が意味のないものだ気づき、学校祭後に「人に頼りすぎない」と変え、様々なリーダーに立候補して活動した結果、「自分の力量も見極めたうえで、人に頼りすぎず力を伸ばしていきたい」とまとめていた。このようにMy Learningを点で捉えることなく、繋げていくように働きかけを行っていった結果、生徒の『俯瞰して振り返る力』を養うことができたと考える。一方で、それを実際の行動、そして成長に結びつけていくことについては課題が見られる。OSさんのMy Learningの「学んだ場面と違う状況でも、学びを確実に生かすという気持ちと、多くの場面に合うように変形させる意識を持つことが大事」というように、『振り返りっぱなし』にならないようにしていきたい。

文責 竹内 恭平

私はTくんの第3回My Learningのポスターにはっとさせられた。彼は「自分の力と計画性」という題でポスターを準備していた。校外学習の実行委員・学校祭での演技・小6インターンシップでの部活動班の班長・美術部副部長と、立候補と他薦で選ばれた4つのリーダーとしての活動を振り返っていた。学校祭の劇で女子生徒の役を好演し、全校でちょっとした人気者となった彼だったが、リーダーとしての自分について悩んでいたことがわかった。彼はポスターの中で、「自分の頭が追いつかず他の人の意見が頭に入らない」「班で決まったことを班長会で正確に話せない」といった体験から、「それが続くとかえって自信をなくし自分の力自体も上がらないのではないか」「今後は、自分の力に合っ

たこと、向いている仕事をして、みんなを支え自分の力を伸ばしていきたい」と書いていた。

小6 インターンシップの時に、彼はみんなに指示をうまく出せず私からアドバイスしたことが何度かあった。彼に前もって伝えたことについては指示できたが、活動の進捗状況を見てメンバーに声をかけるのは難しかった。活動を振り返って彼なりに出した答えが第3回の My Learning のポスターだった。

3月6日の My Learning では、彼の発表に対して他学年の先輩はどのような意見を述べるだろうか。彼と似たような経験を持つ生徒もいるはずである。彼が生徒同士の語り合いの中から新たな気づきを得られたらいいと思う。私自身も My Learning の語り合いを聞いて、Tくんへのかかわり方を振り返りたい。どの時点でどのような問いかけやアドバイスが有効だったのかを考え、次学年の実践につなげたい。 文責 森 阪 美 文

小6 インターンシップでは、建物の構造班を担当することになった。あらかじめ、学年の教員で、「教員は見守る立場で生徒と関わり、生徒たち自身が考え、活動を創り上げていく」ことを共通理解したため、私自身としても、絶対に押さえない部分だけは一緒に考えて外さないようにし、その部分以外の説明や練習については生徒自身が考え、決めていくようにしていった。最初は「これが正解なのか」と答えを教員に求める生徒がいたが、グループリーダーや仲間に相談するようにアドバイスをしたところ、次第に仲間同士での話し合いが増え、自分たちで決めていく部分が増えていった。本番前に全員でリハーサルをしたあと、もらった意見に目を通し、グループで「こんな風に改善していったらどうかな」という話し合いはもったものの、実際に何度も練習をする姿はあまり見られなかった。これまでの私だったら、もっとこうした方がいいと、口を出しすぎてしまうことがあったが、「失敗の中から学ばせること」も大事であると考え、あくまで見守る姿勢を貫き、このまま当日を迎えることになった。

当日は説明が長くなり時間が延びてしまったり、説明しきれず終わったりすることもあったが、その原因を生徒たちに振り返らせたところ、「もっと練習すればよかった」と、本番をイメージした準備をすること、そして何度も練習を重ねて改良していくことの重要性に気付くことができた。まさに、失敗から学ぶことができた瞬間であった。また、ある生徒は「小学校の時は、自分たちで1から創り上げるような経験をしてこなかった。でも、今回初めて企画から本番まで仲間と話し合いながら創り、やりきることができて達成感でいっぱいです!」と振り返っていた。もし、私が1から10まで指示を出し、生徒を導いていたら、失敗は少なかったかもしれない。しかし、自分たちで考えてきたからこそ、失敗が生まれたが、そこからの学びや達成感が得られたのではないかと考える。もちろん、手助けが必要な場合もある。生徒たちを信じ任せるためにも、生徒を見取り、今どのような関わり・声かけが必要かを考える、そして「これは失敗しても大丈夫」という見極めを正しくしていくことが大切であると思った。 文責 赤 澤 聡 美

第2学年

I 学習のテーマと理由

3年間のテーマ

『AGO-NAVI～伝承し、新化しつづける～』

テーマ設定の理由

「AGO-NAVI」の「NAVI」の意味を再考した結果、「安居の良いものを受け継ぐこと」「バージョンアップをさせて次に伝えること」を大事にしたいという思いに気付いたためである。なお、「進化」ではなく「新化」という造語を用いているのは、「進化」だと今までの伝統を全く新しい形に変えるようなイメージがあり、残していくべき伝統は残し、私たちならではの考えを取り入れ、バージョンアップをして新しい伝統を創っていくという意味を込めているからである。

さらにこのテーマで活動を進める中で、自分自身を「NAVI」すること、つまり自分自身をよりよく導いていくことも意識して活動していった。

II 1年間の取組の概要

1 1年間の流れ（別紙プロジェクト学習のまとめ参照）

2 共に創るプロジェクト学習にするために

今年度の学年プロジェクト学習を共に創るために、3つの活動に取り組んだ。

(1)「AGO-NAVI」を語れ

昨年度の1年間に学年プロジェクトではどんな活動をしてきたのか振り返り、学年教員に語ることから、残り2年間の活動方針を考える活動に取り組んだ。生徒たちは、初めは主に小6インターンシップのために取り組んだ「安居中完全攻略本」（安居中学校の紹介パンフレット）に関する活動とその成果を語ろうとしていた。その後、教師が「AGO-NAVI」の意味やこのテーマをつけた理由を質問すると、実行委員の数名のみが「地域に貢献できるような、ガイドブックを作る」と答え、残りの生徒は「分からない」という反応を示していた。学年の中で一人一人の認識が違っていたので、「AGO-NAVI」の特に「NAVI」の意味について考える時間を設けた。これは、学年プロジェクトで行う活動に対して大まかな枠組みを設け、かつ学級全体が同じ目的を共有するために行った。その際に生徒たちは、「NAVI」の意味として、「導く」「案内する」「紹介する」「伝える」と徐々に考えを広げていった。ここで、さらに新しい視点として「win-win」という考えを生徒に提示し、安居中や安居地区にとってプラスに

なるものはあるが、生徒たち自身にとっても学年プロジェクトを行うことで得られるものは何だろうかと考えた。この活動によって、生徒たちはこれから行うべき活動の中身を想像することができていた。

その後、クラス全員が同じ目的を意識して活動ができるようにするために、サブタイトルを設定した。これは、実行委員10名が、これまでの話し合いを通して「NAVI」の意味として大切にすべきことを基に考えた。その際、実行委員長は「学年プロジェクトのテーマは、先生と一緒に考えていた。しかし、今回の振り返りで、クラスの人それぞれを『先生が考えた』と思っていたことが分かった。だから、今回はサブタイトルを自分たちで考えなければいけないと思う。」と話した。その結果、次の3点に重点を置くことにした。（サブタイトルの意味の詳細は、I テーマ設定の理由 を参照。）

- ①安居中や安居地区の伝統を多くの人に知ってもらうこと
- ②そのためにまず自分たちが伝統を学ぶこと
- ③学んだ伝統をよりよくしていくこと

（2）プロの力を肌で感じて、自分を新化させる

働く大人と関わることを通して、自分自身を振り返って新たな力を身につけるために、職場体験学習を行った。伝承し、新化していくためには、生徒自身が自分自身にどのような力が必要であるかを考える必要があり、且つ働く大人との関わりを通して、自分のことだけでなく、「相手にとってもプラスになるもの」という考え方を身につけていく必要があると考えたからである。生徒が主体的に考えられるようにするために、教師は学習の流れに「職場の方へのインタビュー&説明会」「面接」を取り入れた。インタビュー&説明会では、職場の方に御協力いただいて、職場体験で受け入れる生徒に対して考えてほしい課題を準備していただいた。例えば、それぞれの職場が抱える問題や実際に取り組んでいる仕事に関する内容であった。このような課題を準備していただいた理由は、生徒の視点で課題を考えることで、職場に対して役に立つことができるのではないかと考えたからだ。これは、（1）の際に生徒に提示した「win-win」の視点に基づく考えで取り組んだ。

また、面接は自分自身を改めて見つめ直し、自分のよさを伝えることを意識して行った。特に面接の事後には、面接官であった職場の方から直接お話を聞く場面を設けた。このときに生徒たちは、自身がアピールしたことは相手にどう見えていたのかを知り、これからどんな力を付ける必要があるのかを考えるきっかけとなっていた。加えて、面接官がどんなことを重要視していたかを知ることでもでき、自分以外の人の価値観で物

事を見たり考えたりすることもできた。

(3) 身についた力を高める節目の会をつくる

学級全体で活動を進める力をつけるために、これまでに学級についた力を高める節目の会をつくった。これまでに、少しずつ「共通理解」「全員で物事を行う」ということに取り組んでいた。そこで、この節目の会においては、会の目的を始め、会のプログラムや準備・練習計画まで、生徒たちと共にひとつひとつ考えていくことに取り組んだ。

節目の会をつくることにおいて、「会の目的を学級全体で考え、設定すること」「それぞれが相手に『伝わる』ように工夫すること」を達成できるように意識した。これまでに取り組んだ学習活動では、その目的を全員で話し合うことまではしていたが、文言を決めることまではしていなかった。そこで、実行委員長は全員で目的を考え設定するために授業を考え、実施した。その結果、節目の会の目的は、これまでに学級についた力である「団結力」「行動力」「協力性」を高めるために行うということを決め、会の名前を「団結の会」とした。

また、「それぞれが相手に『伝わる』ように工夫すること」は、生徒が話し合いや練習で考えを『伝わる』ように話し、よりよい会をつくり上げるために意識をしたことだ。団結の会をつくるための授業では、実行委員長を中心に授業や練習計画を考えて取り組んだ。特に、リハーサルでは、前回よりもよりよいものにするためにアドバイスをするために「伝わるように話す」ということを意識し始めた生徒が見られた。このような過程で、実行委員もその他の生徒も互いに、思いや考えを「話す」「伝える」では不十分で、「伝わるように話す」ということが必要だということを学んでいた。

文責 高田安希子

Ⅲ 成果と課題

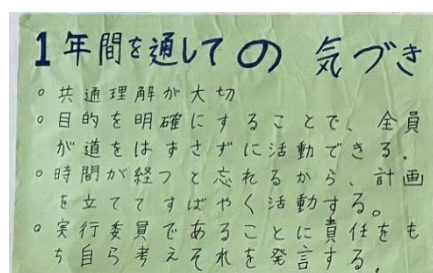
今年度の活動を振り返ると、生徒たちの意識が変わったきっかけはⅡの(1)において、これまでの活動を振り返った生徒から「全員で共通理解が必要だ」という考えが生まれたことだと考える。これは、実行委員以外の生徒たちが「もっと頼ってほしい」「実行委員だけでなく、みんなで共通理解をする必要がある」と学級で話したことがきっかけであった。しかし、実行委員長である生徒Kは共通理解の大切さを理解しながらも、実際に全員で物事を進める方法があるのか分からないと振り返っていた。

その後、Ⅱの(2)の学習において「共通理解」を実践していくために、学年掲示を学級全体で取り組むという方法を考えた。これまでも学年掲示は制作してきたが、作るのは

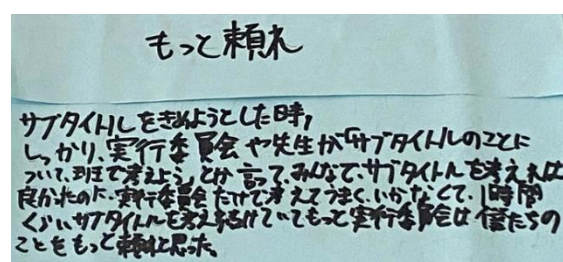
実行委員が中心であった。それ以外の生徒は、学習活動を自己評価したものを使ってもらい、という形で参加していた。これを、全員で作るために、職場体験学習の実行委員である生徒Kは、掲示物のデザインを考えたが、全員が掲示物作成に関わる方法が分からず悩んでいた。教師との対話の中で生徒Kは、時間の不足や全員に関わってもらうには仕事が少ないことを吐露し、掲示物作成の時間になっても学級に対して制作の方法や流れを話せずにいた。その後生徒Kは、実行委員だけで掲示物を制作するという決断をし、残りの生徒には職場体験当日の様子や学びをまとめるように指示を出していた。

実行委員以外の生徒が役割を終え始めたことから、教師は生徒Kに対して、役割を終えた人は学年掲示制作に加わることを提案し、徐々に人数が増える形で学年掲示を全員で作り上げた。完成後に生徒Kは、「今まで共通理解や全員で作る方法が分からなかったが、今回の学年掲示の制作で全員で作ることが分かった。やってみて分かることもあると学んだ。」と振り返っていた。

今年度最後の取組として行ったⅡの（３）においては、「共通理解が必要」という認識から「全員で物事を進める・作り上げる」という意識に変わったと感じている。それは、会の目的を考える話し合いのときであった。実行委員長の授業において、「団結力」「行動力」「協力性」を高める会をつくると決まった。このときに、「この３つのどんな側面を高めたいのか」と生徒に問うと、「今まではリーダーだけが責任を負っていたから、今度は全員が責任を持って活動をすべき」「一人一人が１００％の力を出して、全力でやるクラスになりたい」「それぞれが全力を出したら、僕たちの信頼関係がよくなることにつながると思う」と生徒が語った。生徒たちは同じものを目指していたことが共有でき、これから同じ目的に向かって会をつくっていけると考えた瞬間だった。 文責 高田安希子



【図１ 中１の学プロを振り返って】



【図２ 中１の学プロでのFさんの学び】

今年度私は、第２学年の年長者として、最終的な壁としての役割を果たすことを考えた。「壁」というと、ともすると「怒り役」「ご意見番」をイメージすると思う。それは間違いではないと思う。実際にそのような場面もあった。ただ結果的に３月の My Learning に

において、団結の会における学びを語る生徒がいたことは「壁」としての成果ではないかと思う。「リーダーとしてのあり方」「伝わりと伝えるの違い」などこれから、様々な取り組みを行っていくうえで、大事にしてくれればよいと思う。さらに言うなら「ご意見番」の中には、「自分たちが取り組んでいることの価値付け」が含まれると思う。2年生で節目の会（団結の会）を行うことになり、その取り組みの中で身につける力をどうするかに時間を割いた。ただ終わってから改めて考えて気づくこともたくさんあるのではないかとも思う。そのような思考に気づかせることも私の役割ではないかと思う。あとは、その気づかせ方でないだろうか。その方法は、たくさんある。だからこそ自分の使える材料は何で、どう使うとよりよいだろうかを考えていく必要があるだろう。学年通信の巻頭言を使った場合もあった。

リーダーのみなさんへ

伊部 雅之

2023年になり、第2学年として2月21日の「団結の会」にむけて、休み時間や給食の時間を使い、準備を進めている姿を見ると、目標に向かって何かに取り組むことの大事さに改めて気づかされます。担任をしていた数年前に、「飛躍の会」に向かって自分たちで準備を進めている生徒の姿に、実は目頭が熱くなっていたことを思い出しました。年を取るごとに目頭が熱くなりやすくなっているのも、今年もうるっとしてしまうかもしれません。

さて、みなさんの活動の様子を見ていてアドバイスを1つします。それは「リーダーの役割」です。みなさんは「リーダーの役割は何ですか？」と聞かれたら、どのように答えますか？

「メンバーをまとめる。」「みんなを引っ張る。」などのように答えるのではないのでしょうか。

音楽の時間に「団結の会」に向けて合唱の練習をしている時のことです。それぞれのパートに分かれて、音取りをしていました。まだまだ自信がなさそうではありましたが、なんとか最後まで自分のパートの音程で歌いきることができました。パート練習の後は、3つが合わせて歌うことになっています。ただ、合わせるまでは、まだ時間が少しあります。そこでパートリーダーが次のように言いました。

「まだ時間があるから、もう1回通して歌うよ！！」

限られた時間を無駄にしないように指示を出したのだと思います。しかし、ここでちょっと考えてほしいと思うのです。1回通して歌うのならば、もっと効果の上がる指示の出し方はなかったのかと。さあ、みなさん考えてみてください。

私は、よく部活動等の時間に「やるなら、考えて、少しでもプラスが多くなるようにしよう！」と言っています。限られた時間の中でよりよいものを創っていこうとするならば、そのような考え方は必ず大切になってきます。ただそれをいざ実践していくことは、とても難しいです。そして、今回の指示を出す場合ならば、その指示に説得力がないといけません。説得力をもたせるには、きっといろいろな準備が必要になるでしょう。「団結の会」の取組を通して、リーダーの役割を改めて考えるきっかけとし、それがクラスや安居中学校の成長につながることを願っています。

生徒にどのような方法で価値付けを行うかも考えたが、学年担当教員にどのように伝えるかも考えなければならない。これはこれからの若手を育成する課題においても大切なことになる。

文責 伊 部 雅 之

第3学年

I 学習のテーマ

3年間のテーマ

『AGO プライド』

今年度のテーマ

「惜しまれて卒業する」



【資料 1 活動内容決め】

【資料2 3年間の目標ロゴ】

Ⅱ 1年間の取組の概要

1 1年間の流れ（別紙プロジェクト学習のまとめ参照）

2 共に創るプロジェクトにするために

①3年間の目標の設定とグループ分け

3年間の目標の設定は、生徒が主体的に活動するため、また、活動が目標からずれないようにするために重要である。

まず、マインドマップで安居地区のイメージをグループごとに書き出していった（資料1）。どの班も「文化歴史」「食」「水」「ホテル」「自然」のキーワードとともに多くの資源が出てきた。そこから、「文化」「歴史」「食」「水・ホテル」の4つのカテゴリーのチームに分かれて活動することに決まった。次に、活動全体の実行委員を決め、実行委員が、このマインドマップを利用し、3年間の目標を決めた。目標を決めるにあたって地域に根ざしたものにすることを念押しした。実行委員が決めた3年間の目標は「AGO プライド」。もともと自分たちの住んでいる地域を好きではない生徒が半数を占めていたので、自分たちが住んでいる地域をまずは自分たちが好きになり、少しでも多くの人にこの地域にプライドを持ってもらおうという願いからこの目標になった。実行委員の提案でロゴも作ることになり、クラスの生徒にロゴ案を募集し、出てきた作品の中から実行委員が組み合わせて作成した（資料2）。

② 1, 2 年目の活動内容

まずは、実地調査を行った。4つのチームに分かれて、地域で活動している方に公民館で話を伺った（資料3）。この地域の方には公民館の方が声かけを行ってくれて実現した。生の話を聞けるという事で、生徒はいきいきした目で活動に臨んでいた。この活動の

後、チームごとに目標を立て、動いていくことになった。活動を行う際は、必ず企画書を作成し、クラス単位の企画は担任に、学校規模の企画は校長にヒアリングを行ってもらい、活動に移るかたちをとった（資料4）。手直しができるように基本的にパソコンで作成した。以下に、チームごとの1, 2年時の活動内容をまとめていく。

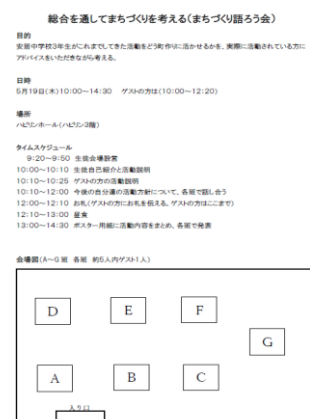
【水・ホタルチーム】

水・ホタルチームは、「安居のホタルをより多くの人に知ってもらう」ことを目標として活動を行った。1年生の6月に「ホタル観察会」を主催した。本来は保護者や地域の方を呼びたかったが、コロナ禍であったため、安居中学校の生徒限定で行った。また、当日観察してもらうために、事前に捕獲したホタルを育てることになった。育て方もインターネット等で一から調べて育てた。産卵はうまくいったが、成虫になる前に水の温度設定とエサの与え方に問題がありうまく育てられなかった。他にもホタルのオブジェを作って道行く人に見てもらおうということになりオブジェを作った。しかし、風雨による劣化の問題を解決できないことに気がつき、外に展示することを断念した。ここで1年目の活動が終わった。

活動内容だけ見ていると失敗したような内容が多いが、各活動に生徒の責任者を設けたことで、それぞれの生徒は深く考え、多くの学びがあったようだ。ある生徒は「今までは言われたことだけを行ってきた。多くの人を巻き込んで行う活動はとても緊張したし責任も感じたが、たくさんのことを考えた」と言っていた。2年目は、活動を精査し、「ホタル観察会」と「ホタルの飼育」のみを行った。ホタル観察会は、本校生徒とその保護者に対象を広げて行うことができた（資料5）。ホタルの飼育も公民館の方と一緒に活動し教えていただくことで、50匹ほどが成虫に育ち、小学生



【資料3 実地調査の新聞記事】



【資料4 生徒がつくる企画書】



【資料5 ホタル観察会】



【資料6 ホタル放流会】

と放流活動をすることができた（資料6）。

【文化チーム】

文化チームは、「安居の文化を知ってもらう」ことを目標とした。活動内容は、安居地区の無形文化財であるオシッサマを含む安居文化の探検ツアーを小学3年生対象に開いた。探検ルートとルート上にある歴史にまつわる物を資料にまとめた。しかし、当日はあいにくの雨で、雨用に用意しておいた紙芝居とパワーポイントの資料で対応するかたちとなった。この直前の対応も生徒たちには大きな学びになったようである。

2年目は、もっと多くの人に知ってもらうために、ふるさとCMコンテストに応募することになった。まず、PR活動の方法や映像作りのヒントをもらいたいという話になり、福井市の広報課の方に来ていただき、勉強会を開いた（資料7）。電話依頼も生徒が行った。アドバイスを元に作成した動画は奨励賞を獲得した。外部の取り組みと連携をはかることも生徒にとっては大きな刺激になったようだった。



【資料7 CM作り勉強会】

【食チーム】

食チームは「安居に伝わる伝統料理を広める」ことを目標として活動を進めた。ホタルの形のクッキーを作ったり、ホタルをイメージしたゼリーを作ったりしていたが、目標と活動にずれが生じていた。活動後半になるとリーダーに抗議をする生徒まで出てきた。生徒の感想に「リーダーとしてまとめられなかった」「何も残せなかった」という声もあった。活動自体は思うようにいかなかったものの「教員にやらされている生徒の姿」はなかった。自分たちで考えるからこそ、そこに責任が生まれるのだと改めて感じた。



【資料8 地域の方との交流】

2年目は、安居地区に伝わる古代米を育て、安居地区で昔から伝わる油揚げを使ったあげ飯と古代米のコラボ食作りを行った。地域の方から郷土料理の作り方を教えてもらい、自分たちが作った古代米を使ってアレンジし、地域の方に食べていただき感想をもらってさらに改善した（資料8）。

【自然チーム】

自然チームは「ビオトープを通して安居の自然について知ってもらう」ことを目標とした。まず、自分たちが安居の自然について知り、それをまとめることで、安居の自然の良さに気付いてもらおうと考えた。中学校の理科の授業ともつながった。植物の写真や生き物の写真を撮影し、図鑑を作ることになった。図鑑を作りながら、この地域のビオトープがあまり知られておらず、足を踏み入れにくい状況にあることに気づき、改善することにした。地域の方の協力を得て草刈りを行った。1年目は綺麗に

したビオトープと簡易版の図鑑を利用して小学3年生に向けて理科の秋の植物調べの授業を生徒が行った。

2年目は、図鑑の改良とミズアオイという絶滅危惧種の植物の保全活動を行いながら、自分たちの活動を広く知ってもらうためにSNSを利用した。SNSの利用は、生徒たちが校長先生に直談判し、しっかりと講習を受けて、掲載する内容をチェックしてもらうことを条件に許可してもらった。まずは、生徒の提案で警察の方に講習会を開いてもらった（資料9）。学校では年に1回SNS講習会を行っているが、自分たちが実際に使うための講習会ともなると生徒の真剣さが違った。SNSではミズアオイの種まきや育っていく様子を発信した。自然チームの活動はビオトープコンテストにも応募し、6位に入賞することができた。

③活動報告書の作成

1年生、2年生の年度の終わりには、チームごとに活動報告書の作成を行った。これは教員側から活動の締めとして行うように指示した。また、作ったものは学校のホームページに掲載することも伝えた。学校のホームページに総合のページを設け、自分たちの活動を掲載できようにした。多くの人の目に触れるということが活動意欲と責任感の向上にもつながった。

④3年目の活動内容

3年目は、チームごとの活動は継続しつつ全体の目標である「AGO プライド」の達成に向けて活動を始めた。クラス全体で考えたが、なかなかまとまらなかった。そこで実行委員から、街づくりのプロから話を聞いてはどうかという意見がでた。そこで、3年生の修学旅行のプログラムの中に「街づくりについて語る会」を設けた（資料10）。

旅行会社の方にも会議に参加してもらった。来ていただくゲストへの電話依頼も生徒が行った。福井駅前ホールを借り、自分たちの活動とゲストの方（旅行会社の方や県庁の方など）の活動、それらを踏まえてこれからどのように進むべきかを小グループで話し合った。生徒からは、「新しい視点で自分たちの活動を考えることができた」等の声が聞かれた。この会を企画した実行委員は、「こんな大きな企画を自分たちが考え成功させることができると思わなかった」「責任を常に感じていた」という声があり、生徒エージェンシーの高まりを感じた。



【資料9】講習会の新聞記事】



【資料10】街づくりについて語る会の新聞記事】

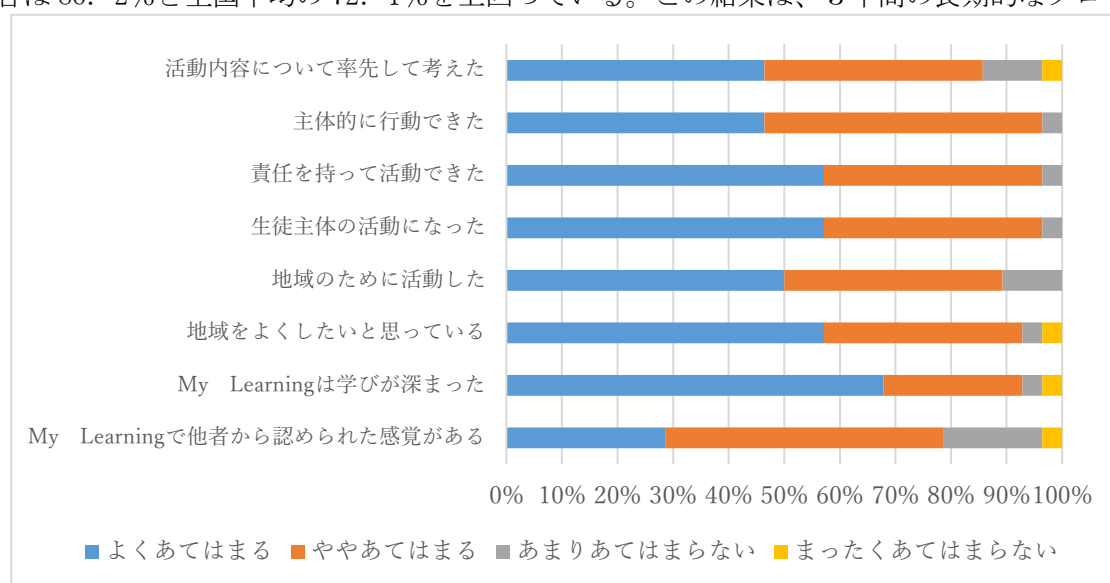
また、修学旅行では4つのチームごとに課題を決め、班別行動を行った。ホテルチームは、同じようにホテルの活動を行っている福井県大野市に行き、ホテル観察会の更なる改善を行った。修学旅行後、地域の方も呼んでホテル観察会を行った。このホテル観察会は4つのチームの活動報告会も兼ねた。文化チームはCM作成をしている福井テレビに行き、自分たちが作っているCMの質の向上に努めた。食チームは油揚げを作り提供している竹田の油揚げ屋に行き、自分たちのあげ飯を食べていただき、アドバイスをいただいた。その後、10月に福井駅前で行われたマルシェで古代米の広報活動を行った。自然チームは実際に図鑑を作っている自然史博物館で学芸委員の方に図鑑を見ていただきアドバイスをいただいた。また、修学旅行後に自分たちの活動を福井市の広報番組で紹介していただくことができた。

文責 川 端 康 誉

Ⅲ 成果と課題

まず、生徒にアンケートを実施した。アンケート結果は資料11である。どの数値も高く、本研究の目的である生徒エージェンシー（自ら考え主体的に行動し、社会変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力）の素地がついてきているのがわかる。

次に、全国学力学習状況調査から本実践と深く関わりのある2項目で検討を行った。「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」に対して、肯定的な回答だった生徒は62.1%と全国平均の30.7%と比べると大きく上回っている。また、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいると思いますか」に対して肯定的な回答だった割合は86.2%と全国平均の72.1%を上回っている。この結果は、3年間の長期的なプロ



【資料11 総合・My Learning を通してのアンケート】

プロジェクト学習を通して、自ら考え主体的に行動し責任を持って地域の発展のために活動してきたからこそその数値であると考えてる。

さらに、生徒と地域の方の感想から考える。資料 12 は街づくりについて語る会後に行ったアンケートの一部である。自分たちで考えた内容だからこそ、そこに手応えと責任を感じながら行うことができています。また、3 年間の長期ビジョンで行うことで、失敗を改善し成功体験に昇華させることもできることがわかった。地域の方々からも一定の評価を受けることができた。

最後に、キャリア教育を活動の中に取り入れることができたことが大きい。コロナ禍で職場体験という形はとれなかったが、生徒の必要に応じて、たくさんの社会人の方と共に活動ができた。本当の意味でのキャリア教育になった。

課題は、他学年との連携があまりできなかったことである。学校全体として異学年のつながりをもっと行っておけば、もっと持続的な活動になった。

生徒

- ・自分たちで考えた内容を自由に形にすることができた。しかし、何をやってもいいというわけではなく、地域に根ざした活動という根本に戻ることによって活動の大きなブレがなく進むこともできた。自分たちでやるからこそその責任と自分から動く意識が芽生えた。
- ・失敗したり友たちとぶつかったりしてつらいときもあったけど、次の活動にその学びを生かして活動することができた。年々グレードアップしていく活動は、わくわくした。

地域の方

- ・活動の内容だけではなく、活動している一人一人が細かい気遣いで活動を支えているのを感じた。安居の子はみんな素敵！
- ・皆さんの学びや学習が地域を明るくします。いつも笑顔をありがとう。

【資料 12 プロジェクト学習の生徒の感想】

文責 川 端 康 誉

文部科学省は「総合的な学習の時間」の目標を『変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する』としている。

振り返ると 3 年間を横断的体系的にとらえ企画することで、生徒は探究的な考えを身に付け、様々な課題解決を図ることができた。生徒は食チームや自然チームなどのグループに分かれて、迷い悩みながらもリーダーを中心に話し合い協働する姿が見られた。その様子を My Learning で発表しお互いに学び合い、さらに考えを深めることができた。

自分史の作成において、どの生徒も「総合的な学習の時間」での苦労ややりがいから学

んだことが記されている。牧田前校長が生徒に、「失敗をおそれないこと。どんどん失敗しなさい。それを乗り越えて初めて生きる力が身につく」とよくお話をされていた。苦労や失敗からの学びを通して人は大きく成長することを生徒から学ばせてもらったと感じる。今後、身につけた学び、生きる力を将来に生かしていくことを期待している。

文責 田村 雅彦

昨年度この学年と関わる中で、教員側が見通しを持ち、生徒に道筋をつけながら関わっていかなくてはならないと感じた。そのため、今年度は、生徒たちと活動計画や残りの準備時間を確認しながら活動することを意識した。それでも、なかなか計画通りには進まず、活動の後半になって慌ててしまうことがあり、生徒自らが考えた計画や目標がぶれないように支えていくことの大変さを感じた。しかし、多くの生徒が、学びをまとめるレポートの中で、「計画性」「見通しを持つこと」の大切さを書き記していた。総合の活動の中で、生徒自身が上記の大切さに気づき、学びとして捉えていたことに昨年度からの成長を感じた。今後も、生徒自身が気づき、学びに変えられるような関わりを意識していきたい。

文責 梅村 泰枝

本年度初めてこの学年にかかわって、しっかりと生徒と共有しなければならない3つのことを学んだ。1つ目は活動の目標を明確にすること。2つ目は目標を達成するために、具体的にクリアしなければならないことを明確にすることである。目標にまっすぐ向かっていく感覚を生徒自身が持っていなければ、活動にメリハリが生まれなかったと感じた。そして3つ目はそれらをクリアするための時間的な見通しを生徒と共有することである。本年度は、指導の計画が不十分な状態で生徒にかかわってしまったせいで、生徒の能力を生かすことができなかったと感じている。来年度は一つ一つの活動で、目標の共有、課題の共有、解決方法と期限の共有を特に意識していきたい。

文責 橋本 甲斐

5章 成果と課題

本年度はすべてを生徒会が行った。このままこの形を続けることで、核となる教員が学校を異動しても理念が生徒の中に残り、生徒から生徒へ受け継がれ、深化していくと考える。新しい年度になれば、そこに携わる生徒や教員がそのときそのときの学校や時代にあった形に柔軟に変えていってほしい。

文責 川端 康誉